



No.59

The University of Tokyo Forests News

科学の森ニュース

September 10, 2012

発行：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

「癒しの森」をイメージ パネル式看板お披露目会

富士癒しの森研究所

2012年7月23日（月）、富士癒しの森研究所事務所入口にてリニューアルされた看板のお披露目会が行われました。昨年6月に富士演習林から富士癒しの森研究所へと組織名称が変更されたことともない、カラマツの風倒材を利用したパネル式看板の制作が2012年1月からスタート。このほど完成した看板は、縦116cm×横200cmで、新名称が彫りこまれた文字パネルと東大教職員や一般の方々の応募作品による絵パネルからなっており、絵パネルには、動物・植物・人・風景など「癒しの森」をイメージした作品が描かれています。お披露目会には、絵パネル応募者とそのご家族など多くの方にご参加いただきました。



リニューアルされた看板と記念撮影

高校生と考える森林の持続可能な未来

北海道演習林

2012年7月24日(火)～27日(金)にサマー・サイエンスキャンプ「森林の未来は?～森を知り、持続的な取り扱いを考える～」を開催しました。サイエンスキャンプ事業は科学技術振興機構が実施する“高校生のための先進的科学技術体験合宿プログラム”で、北海道演習林では昨年に続き2回目の開催です。

プログラムでは、森林の構造や動態に関する調査の体験、北海道演習林が考究する「林分施業法」に基づく一連の森林管理の紹介を経て、持続的な森林の取り扱いについて考察します。全国から集まった15名の高校生はとても熱心かつ意欲的で、「森林を管理するには様々な要素を考えないといけない事を知り、難しさと感じました」「将来農学部に進む事を決意しました」などの声をいただきました。森林と森林科学の魅力を、存分に伝えられたものと思います。



昼食後のひととき チームワークも抜群です

夏休み恒例「高校生のための森と海のゼミナール」を実施しました

千葉演習林

2012年7月30日(月)～8月1日(水)の日程で「高校生のための森と海のゼミナール」を実施しました。今年は11名が参加し、1日目午後から2日目午前中は千葉演習林で、樹木の直径や樹高の測定、植物標本作製を行いました。1日目の夜間にはライトセンサス法を行い、演習林に生息

するシカの夜の行動を観察できました。2日目午後からは千葉大学海洋バイオシステム研究センターで海の生物についての講義を受け、プランクトンを顕微鏡で観察し、また磯にいる生物を直に触りながら観察しました。ゼミ期間中は天気にも恵まれ、参加者は汗を流しながらも暑さにも負けずゼミに取り組んでいました。



樹木測定の説明をうける高校生

生態水文学研究所創立90周年記念シンポジウム

生態水文学研究所

生態水文学研究所(旧・愛知演習林)は、1922年に愛知県の尾張東部丘陵の一角に設置され、今年で創立90周年を迎えています。同研究所は、周囲に広がる荒廃したハゲ山の修復・緑化技術を研究し、実践することを目的として設置されました。現在では、かつてのハゲ山には森林が再生し、同研究所はこの地域において一定の役割を果たしたといえますが、今後、同研究所はどのような役割を果たしてゆくべきでしょうか。また、地域社会からは、どのような役割を担ってゆくことを期待されているのでしょうか。創立90周年を機に、本学の太田猛彦名誉教授や鷲谷いづみ教授をお招きし、これらの点についての議論を深めるためのシンポジウムを2012年12月1日(土)に瀬戸市内で行います。日時・場所・参加申込の詳細については、同研究所のホームページ(<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/eri/>)をご覧ください。

東京大学は、教育・研究機関としてサステイナブルな社会の実現への道筋を示すために、2008年4月、東大サステイナブル・キャンパス・プロジェクト(以下、TSCP)を立ち上げました。TSCP室では、本学全体のCO₂排出総量について、2006年度を基準として2012年度に15%削減(実験系を除く)、2030年度に大学全体で50%削減を目標に様々な活動を行っています。

具体的には、東京大学内の建物毎にエネルギーの消費実態を把握し、エネルギー消費密度の高い建物から優先順位をつけて対策を進めています。また、選任の教員と職員からなるTSCP-Officerを中心に、継続的な環境行動啓発、設備の効率的運用などソフト面の取り組みも進めています。さらに、TSCP活動を全学的に展開していくため、学生のアイデアによる省エネ啓発ポスターや温度シールの作成を行っています。

また、TSCP室では演習林と連携して、オフセットクレジットの創出にも取り組んでいます。千葉、北海道、秩父、生態水文、樹芸の各演習林・研究所において、環境省が主導するJ-VER(日本版排出削減認証)制度における間伐促進型プロジェクトを実施しています。森林におけるCO₂吸収量の認証により創出されるクレジットは、全国の大学初めての試みで、重要な取り組みのひとつとなっています。



学生デザインの温度シール(2011年作成)



間伐促進型プロジェクトによって生産された丸太(北海道演習林)

演習林のイベントダイジェスト 詳細はホームページをご覧ください、各演習林にお問い合わせください。

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
2~3日 総合科目「ダムと森林」*(生水研)	22日 大麓山ハイキング登山会(北海道)	1~4日 体験ゼミ「夏版・伊豆に学ぶ1」*(樹芸)	13~17日 体験ゼミ「企画系さらに伊豆に学ぶ」*(樹芸)	13~14日 神社山自然観察路 秋季一般公開(北海道)	1~2日 平成24年度技術職員等試験研究・研修会議*(秩父)	1日 東京大学生態水文学研究所創立90周年記念シンポジウム(生水研)
2~3日 体験ゼミ「危険生物の知識」*(秩父)	22日 森林教室「世界に一つの樹木図鑑を作ろう」(田無)	6~10日 体験ゼミ「森に学ぶ(ふらの)」*(北海道)	24~28日 総合科目「伊豆に学ぶプラス」*(樹芸)	17日 第3回温室特別公開日(樹芸)	11日 東海銀杏会演習林見学会*(生水研)	1~2日 秋の一般公開(千葉)
3日 「子ども樹木博士」認定会(田無)	23日 富士癒しの森研究所パネル式看板お披露目会*(富士)	11~12日 体験ゼミ「森に学ぶ(秩父)」*(秩父)	25~28日 体験ゼミ「森に学ぶ(伊豆)」*(樹芸)	20日 第4回温室特別公開日(樹芸)	23~24日 秋の一般公開(千葉)	2日 第3回森林水文学を考える若手研究者の会*(生水研)
3日 体験ゼミ「都市の緑のインタープリター」*(田無)	24~27日 JSTサマー・サイエンスキャンプ「森林の未来は? ~森を知り、持続的な取り扱いを考える~」(北海道)	11~12日 せと環境塾2012講座『森と水のエネルギー』(生水研)	27~29日 第5回アジア大学演習林コンソーシアム*(富士)	21日 秩父演習林見学会(育成資金寄付者対象)* (秩父)	未定 「子ども樹木博士」認定会(田無)	7~8日 総合科目「森のエネルギーを使いこなす」*(秩父)
6~8日 関東甲信越大学演習林技術職員研修*(富士)		17~21日 総合科目「伊豆に学ぶプラス」*(樹芸)		27~28日 紅葉の自由見学日・ワサビ沢展示室特別開室(秩父)		9日 影森祭(秩父)
7日 学内公開プログラム「新緑の富良野の森を訪ねて」*(北海道)		18~21日 体験ゼミ「夏版・伊豆に学ぶ2」*(樹芸)				12日 第5回温室特別公開日(樹芸)
8日 富良野地区合同ワークショップ 「富良野地方の美しい農山村景観維持のために」(北海道)		21日 運動会学生との共同作業*(富士)				15日 第6回温室特別公開日(樹芸)
9~10日 演習林交歓会2012(演習林教職員と家族等の親睦会)* (富士)						
24日 北海道演習林公開セミナー(北海道)						

凡例・・・無印:一般向け :学生向け :その他

クヌギ

ブナ科コナラ属

学名： *Quercus acutissima*

クヌギは武蔵野の雑木林を代表する樹木です。化石燃料が主要エネルギーとなる 1960 年代以前は、薪や炭、シイタケ原木として人々の暮らしに大いに役立っていました。当時はクヌギを短い周期で伐採、萌芽再生させることで、15～20 年生の若い林の状態を維持していました。クヌギはカブトムシやクワガタムシが捕れる木としても有名です。虫は樹液に集まってくるのですが、樹液は決まって樹皮が病気や傷で痛んだところから出てきます。田無演習林では老齢化したクヌギからよく樹液が出ています。若いうちは薪炭として人に利用され、年を取ると虫の餌場となるなど、他の生き物との関わりの多い木です。

田無演習林



クヌギの樹液に群がる虫たち

コラム

特別天然記念物オオサンショウウオを守る

生態水文学研究所 岩井紀子



生態水文学研究所から車で 15 分ほどのところにあるじやがほらがわ蛇ヶ洞川、日向川には、オオサンショウウオが生息しています。本種は特別天然記念物に指定されており、東限にあたる瀬戸市でもその保全に向けた活動が行われています。瀬戸市や東山動物園によって行われた生息状況調査では、これまでに 50 個体以上にマイクロチップが埋め込まれ、個体識別がされています。しかし近年は、再捕獲率がほぼ 100%と新規の個体が見つからない状況

で、繁殖や若齢個体の生育がうまくいっていない可能性が懸念されています。生物保全においては、対象種の生態を明らかにするとともに、個体数の変動などを経年的にモニタリングしながら、保全対策を立てていくことが求められます。また、水生生物が対象である場合は特に、その生息地である水場を守るだけでなく、集水域全体を視野に入れる必要があります。現在、意識の高い地元の方々や、瀬戸市が一緒になって調査を続けておられますが、今後も注意深く見守るとともに、繁殖生態や若齢個体の好適な生息環境を解明し、集水域を含めた生息環境の改善を図っていく必要があります。

科学の森ニュース (The University of Tokyo Forests News)

第 59 号 (No. 59)

発行日 平成 24 年 9 月 10 日

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

発行人 鈴木雅一

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林広報情報委員会

TEL 03-5841-5497 FAX 03-5841-5494

編集人 後藤 晋

E-mail mori2010@uf.a.u-tokyo.ac.jp